

『やすらぎの花園・性交病棟』 ご奉仕ナースの快感と嫉妬～第 1 章～

現在、ステージ③に所属するナースは 2 名。看護師長の山咲佐和と今年 30 歳になったばかりの佐伯美和子である。

美和子は中高一貫の女子校を卒業したあと、人の役に立ちたいという想いから看護専門学校を経て看護師になった。大学の看護学部も視野に入れていたが、一年早くナースになれる専門学校を選んだ。現在は一人暮らしで恋人はいない。身長 165 cm のスレンダー体型で D カップ。細くてくびれた腰の細さがより胸の大きさを際立たせてた。男性からのアプローチは中学時代から絶えることのない美貌を誇り、女子生徒から告白されることもあった。看護師になって 2 年目にこの性交病棟の存在を知ってからは、

『すべての時間を患者さんのために捧げたい！』

という気持ちが日に日に増していき、付き合っていた恋人と別れて性交病棟に転科してきた。それ以来、恋人を作ることなく、『恋人は患者さん』

として性交看護だけに全力を注いでいる。

普段から患者さんのために下着選びも重要な仕事と考え、性交看護前には患者の要望を聞いてから下着を履き替えていた。さらに様々な体位で性交看護ができるように日々の柔軟体操を欠かすことはない。規則正しい食生活も送って肌荒れの予防に努め、陰部の含めた全身脱毛をして、いつどんな場所で患者さんに愛撫されても失礼のないように柔らかくツルツルの肌を維持するために体調管理もしている。

「佐伯先輩はプロ意識を持って患者さんのために働くから尊敬しています」

と後輩ナースたちの憧れの的でもあった。

ただ、美和子は昨年まで 29 歳でステージ②に所属して毎日、中出し性交看護をするエリートナースであったが、30 歳になってステージ③に移動してからはとたんに性交看護の機会が減った。美和子は突然の変化に戸惑っていた。

（もう 3 ヶ月以上も性交看護をしていない）

（年齢で区切られるなんておかしい）

（私はほかのナースよりも患者さんへの奉仕の精神は強いはず）

（毎日、時間の許す限り患者さんの中出しを受け止めることができる）

なのになぜ？と美和子は苦しんでいた。

性交看護の数が激減したのはステージ③になったことだけが理由ではない、と美和子は感じていた。そのことで看護師長の山咲佐和に対してある疑惑の念を抱いている。実際はステージ③を希望する患者はいるはずなのに、自分のところには性交看護の指示が出ないのはもしかすると看護師長の佐和がステージ③を希望する患者すべての性交看護をしているのではないだろうか。美和子はそう疑っていた。

看護師長の山咲佐和は 37 歳で美和子と同じ独身ナース。やや肉付きの良い体に胸は大きくてくびれ腰、唇の下にある小さなほくろや色っぽい仕草から患者からも信頼も厚い。プライベートでのセックス経験も豊富で、技量や奉仕の精神の強さから看護師長に抜擢された。

ただ、本来なら性交看護ができるのは 35 歳までというルールがあるのに、看護師長という立場を利用して 37 歳になる今も自ら特例を作って性交看護をしている。日々の性交看護のナースの割り当ても佐和が独占して決めているため、ステージ③希望の患者を一人占めしているのではないかと美和子は疑っていた。それに美和子には看護師長を疑うしかりとした理由があった。

1 ヶ月ほど前の仕事終わりの更衣室でのことだ。佐和と二人になったことがある。その日もステージ③の性交希望者はないはずだったのに佐和はセクシーなデザインの紫の下着を履いていた。

（いつ性交看護になってもいいようにちゃんと準備してるんだな）

とその派手な下着姿を見て美和子は感心した。

「ステージ③希望の患者さんは本当に少ないんですね」

と美和子は寂しそうに言った。

「そうね。やっぱり若いナースには勝てないわね」

と佐和は特に表情を変えずに言った。

「ステージ②のときは毎日性交看護してたのに・・・」

「そんなこと言ったら、私なんてもっと長い間、患者さんにご奉仕性交看護してないわ」

「あ、そうでしたね。すみません」

「いいのよ。私たちの目的は患者さんのストレス解消よ。それさえできていればいいの。若いナースたちに任せましょ」

「そうですね。患者さんのためですよ」

美和子は患者のストレス解消よりも自分が患者と性交看護したいという気持ちが勝っていたことを恥じた。患者さんのためと言っておきながら情けない。美和子は白衣から私服に着替えながら反省した。

「すみません。山咲師長、ちょっといいですか？」

新人のナースが更衣室に来て言った。

「ん？ どうしたの？」

二人が少し会話をしてあと、佐和は脱ぎかけの白衣を着直した。

「患者さんから呼ばれたから戻るわね。美和子さん、気をつけて帰りなさい」

「はい。ありがとうございます。お先に失礼します」

美和子はそう言ってナースステーションに戻る佐和にお辞儀をした。顔を上げてバッグを手にしようとしたとき、佐和のロッカーの戸が開いていて中が見えた。美和子は何気なく見るとビニール袋に入った使用済みらしき黒いショーツが入っていた。ショーツには白い液体が付着していた。美和子にはその白い液体が何かすぐにわかった。患者の精液だった。

（え！ どうして？）

今日もステージ③で性交看護を希望する患者はいなかったはず。口淫看護を希望する患者が一人ただけでその患者を担当したのも美和子だった。看護師長の佐和は手淫看護すらしていないのに。

（まさか？）

美和子は佐和のロッカーにあるビニール袋の中の下着に手を伸ばした。間違いなく精液だった。しかも、一度は佐和の膣内に放出されたであろう精液だと美和子にはわかった。

（これって性交看護のときの射精？）

美和子は疑いたくなかったが、疑わざるを得なかった。

カレンダーはもう秋なのに暑い午後だった。美和子は昼食を終えてから 4 人部屋に入院している患者の検温に向かった。病室に入っていくと美和子の担当患者以外の 3 人のベッドのカーテンは閉められていて、ギシギシとベッドのきしむ音が病室内に響いていた。それに聞き慣れた同僚ナースの激しいあえぎ声も聞こえてくる。

美和子はため息をついて検温を始めた。

（みんな性交看護中か・・・）

（でも、私は手淫看護だけ・・・）

（私の膣を使ってほしい・・・）

美和子は心の中で嘆いてから無理に笑顔を作って担当患者に、

「検温しますね」

と話しかけた。

患者のベッドは右手前にあって、患者は美和子に気づくと小さく会釈してスマホをベッドサイドの小さなテーブルに置いた。

担当患者の検温を終えると、

「昼のお薬をここに置きますね」

と美和子は言ってベッドサイドのテーブルに薬を置いた。それから、

「今日は手淫のご希望でしたよね？今から始めますね」

と優しく言うと患者は、

「お願いします」

とだけ小さな声で言った。

まだあどけなさの残る若い患者のパジャマのズボンと下着を脱がすと、ペニスはすでに大きく勃起していた。

大きい！

片手じゃ足りない！

患者の男性器はこれまでに見た中でも上位に入る巨根だった。射精の瞬間の男性器のうなりはきっと激しいだろう。だが、美和子はそれほど嬉しくはなかった。というのも、美和子はまだ小さく柔らかいペニスを自分の手で刺激して勃起させるのが好きだった。自分の手のひらで大きくなっていく男性器を見るのが好きだった。それが患者への奉仕の表れだと思っていたのだ。だから、すでに勃起している男性器を刺激してただ射精させるだけの作業に物足りなさを感じていた。

（どうして？）

（こんなに大きいのに！）

（私が勃起させたかった！）

（口でご奉仕したい！）

（跨がって騎乗位で挿入したい！）

（患者さんの男性器を私の膈内で看護したい！）

（一滴も残さずに中出し射精してほしい！）

そう願ったが、それは叶わない。ナースから患者への性交看護の誘いは禁止されていた。性交看護はあくまでも患者の要望に応えるためにあるからだ。

美和子は寂しさを抱えながらも勃起した男性器を握ると優しく刺激を始めた。ゆっくりゆっくり上下に刺激していき、男性器に柔らかい手の温もりを伝えた。

「いつでも射精していいですからね」

美和子はそう微笑むと患者に顔を近づけて唇を重ねた。まだ若く柔らかい唇だった。

少しだけ軽いキスをしてからディープキスへ移ろうとした。激しく絡み合う舌と舌。お互いの激しい息を吸いながら唾液を交換する。美和子はそんなキスが好きだった。

だが、美和子が舌を患者の口の中に入れようとしたときだった。

「ううッ」

という患者の声と共に男性器から精液が溢れ出てきた。

（えッ！もう終わりなの？）

（えッ、こんなにいっぱい！）

美和子は心の中でそう言った。だか、それを表情に出してはいけない。

「スッキリしましたか？」

と美和子は笑顔を作って言った。

ほかの 3 つベッドが激しく揺れている音やナースたちの喘ぎ声を聴きながら飛び散った精

子をタオルで拭いてから患者に下着とパジャマを着せた。
（こんなに早く終わってしまった）
（物足りないわ！）
（せめて口でご奉仕したい！）
（できることなら患者さんに股がって騎乗位でご奉仕したい）
そんな気持ちを隠して、
「何かありましたらナースコールを押してくださいね」
と穏やかな表情で美和子は病室を出た。

ナースステーションの手前で、先週、整形外科から性交病棟に転科してきたばかりの白石百合花が患者にディープキス看護をしていた。百合花は元々は別の病院に勤務していたが、性交病棟に勤務している姉の白市奈々子の影響でこのクリニックに就職し、研修を受けて性交病棟へ配属されたエリート候補ナースである。

百合花は患者に強く抱きしめられながらキスをしていた。患者の右手は百合花の F カップはある乳房を白衣の上から揉んでいる。二人は美和子を気にすることもなく、くちゅくちゅと音を立ててキスをしている。

「もっと激しくキスしてもいいですか？」

患者にそう言われて百合花は患者の首に腕を絡めてしがみついた。

「今日は私が性交担当ですから好きなようにしてください」

百合花は唇を離すことなく言った。

「今から廊下でしてもいいですか？」

と患者はスカートの中に手を入れながら言った。

「はい。大丈夫ですよ」

百合花はそう言うと言者から離れて近くに置いてある可動式の間仕切りで廊下に外からは見えない空間を作った。百合花と言者は間仕切り中に消えた。

本来、性交看護は病室でしか行えない行為だったが、

「患者さんの性欲にはどんなときでも対応したい」

というナースたちの熱意から浴室、トイレ、処置室、屋上など病院内の第三者に見られない場所なら性交看護が許可され、その流れから今では間仕切りで空間を作ることで廊下での性交看護もできるようになった。

「百合花さん、ぐちょぐちょに濡れてるよ」

と言者の声が聞こえた。

「いや、恥ずかしい」

百合花がそう言うてからくちゅくちゅという男性器を舐める音が廊下に響いた。百合花は口でご奉仕を始めたようだ。

「いっぱい中に出してくださいね」

百合花がそう言うと言パンパンと激しく突きまくる音が聞こえてきた。おそらく患者は立ちバックの体勢から百合花の膣内へ挿入したのだろう。百合花の悦びに満ちた喘ぎ声が聞こえた。静かなはずの廊下でそこだけ生命力に満ち溢れていた。

美和子はその横をゆっくりと静かに通りすぎた。だが、耳で二人の会話をしっかり聴いていた。廊下ではほかにも三組のナースと言者がディープキス看護していた。廊下の壁に押し付けられながら患者の首に腕を絡めてキスをするナースもいた。美和子は羨ましかった。廊下でもトイレでも浴室でも性交看護が行われている。なのに自分は手淫らだけ。

どうして性交できないの？・・・

美和子は性交病棟に移動する前の新人ナース時代を思い起こした。ナースになれた喜び、患者の病状が回復していく喜び。患者に感謝される喜び。心からナースの道を選んでよか

ったと感じながら働いていた。その頃のことを思い起こすと心が少し落ち着いていくのだった。

あれはまだ、ナースになって一年目のことだった。まだ性交病棟が開設される前で性交看護という言葉も知らない新人ナースと呼ばれていたあの頃。新人ながらも患者のニーズに焦らず対応できるようになっていた時のことだった。美和子は一人の少年患者の担当になった。おとなしく無口な少年だった。美和子は信頼関係を築こうといろいろな形でアプローチしてみたが、少年はなかなか心を開いてくれなかった。

清拭で少年の陰部を洗っていた時のことだった。美和子は特に意識することなく少年のペニスを左手で握って右手のタオルで拭いていた。まだ入浴の許可が出ておらず、毎日の清拭でも汚れが溜まってなかなか落ちなかった。美和子が亀頭のくぼみを拭いていたとき、「ごめんなさい」

と少年は小さな声で言った。

美和子は少年がなぜ謝るのかわからなかった。

「どうしたの？」

と口にしようとした瞬間に理由がわかった。美和子の手の中で少年のペニスが瞬く間に勃起していった。美和子は戸惑った。これまでに男性患者が清拭中に勃起することは何度かあったが、少年に性欲があるなんて想像すらしていなかったからだ。戸惑いながらも美和子は勃起していく少年のペニスを手のひらに感じた。よく考えればいくら少年でも性欲はあるはずだった。自分が少年と同じ歳の頃にはすでにマスターベーションを覚えて、家族が寝静まった深夜にひっそりと快楽に耽っていたのだから。それは恥ずかしい思い出だけれど、気持ちいい思い出でもあった。そう思うと、美和子は嬉しくなった。さっきまで柔らかく小さかった少年のペニスが今では自分の清拭の刺激で激しく逞しく勃起している。少年がまるで心を開いてくれたように感じた。それに勃起は体調が良好な証だから。ただ、ほかにも患者がいる四人部屋。少年は自由に好きなようにマスターベーションはできないだろう。もしかしたら性欲が溜まってつらいのかもしれない。私なら三日以上はマスターベーションを我慢できない。

通常の看護ならこんなとき、患者の勃起が治まるまで待つか、手短に清拭を済ませて何事もなかったかのように病室を出るのだが、美和子は勃起したペニスの清拭を続けた。

「大丈夫よ。おちんちんが大きくなるのは健康な証拠だから。気にしなくていいよ」

と美和子は優しく微笑んだ。

「はい・・・すみません・・・」

と少年は小さな声で言った。

「汚れが溜まってるからもう少し拭くね」

美和子はペニスを握っていた左手を一旦離してガーゼを手を持った。そのガーゼを少年の亀頭に被せて左手を優しく上から被せた。そして右手のタオルを置いて素手に石鹸をつけてペニスを洗い始めた。

「素手で汚れを確認しながらキレイに拭くね」

「あ、はい」

「痛かったら教えてね」

美和子はまた優しく微笑んで右手でペニスを拭いていった。だが、それは清拭というよりも明らかに手淫という性的な刺激だったが、美和子はあくまでも患者さん陰部を清潔に保つための処置と自分に言い聞かせた。

ペニスは少年の幼い顔立ちとは違って、まるで別の生き物のように堅く強く逞しかった。思春期の少年がどのくらいの時間をかけてマスターベーションで射精するのか美和子にはわからなかった。だからいつ少年が射精してもいいようにしっかりと準備していた。

時間にして3分も必要なかった。美和子の右手がペニスを握りながら上下していくと、

「うっ」

と少年は声を漏らし、それと同時にペニスが大きく反り返って脈打った。睾丸から出てペ

ニスの管を通して流れる精子の勢いを美和子は右手にしっかりと感じた。左手を被せたガーゼが少しずつ温かく湿っていくのもわかった。少年は射精したのだ。それも美和子の柔らかな刺激によってだ。

美和子は射精に一切気づかないふりをして、

「うん、キレイになったね」

と言ってタオルをペニス全体に被せた。ペニスの先端のガーゼごと精液をタオルでキレイに拭いていった。

「お疲れさま。時間がかかってごめんね」

美和子は柔らかに微笑みながら少年に下着とパジャマを着せた。

「何かあったらナースコールを押してね」

そう言って美和子がベッドから離れようとした。するとその時、

「あ、あのう」

と少年は小さな声で言った。

「ん？どうしたの？何かすることある？」

「いえ、ありがとうございます」

「ううん、疲れたでしょ？ゆっくり休んでね」

「はい・・・」

美和子は最後まで射精については触れなかった。あれは性処理ではない。普段通りのただの清拭だ。

廊下に出てナースステーションに戻る途中、美和子は少年からもらった「ありがとうございます」の言葉を噛みしめた。これまでに患者からもらったどの感謝の言葉とも違って、美和子の脳内に染み込んだ。絶対にしてはいけないことを誰にも知られずに成し遂げた喜びに満ちていた。それは一切の後悔のない喜びでもあった。

『ナースによる性欲処理』

この言葉が美和子の脳内を駆け巡った。だが、それは決して認められる看護ではない。と同時に患者のことを想えば絶対に必要な看護のはずだと美和子は強く感じた。

どうすればいいのか？

叶わないことなのか？

してはいけないのか？

答えの出ないまま美和子はナースステーションに戻った。

それから少年の担当になるたびに美和子は清拭という名の性処理をした。絶対に誰にも知られてはいけない秘密の看護。当然のことながら少年も性処理をしてもらっていると気づいているはずだ。でも、それには触れてこない。当事者である美和子と少年の間ですら秘密で行われている性処理看護だった。

美和子は次第に、手だけではなく自分の体すべてを使って看護したいと思うようになった。少年のペニスを、そしてすべてを受け入れたくなった。全身を使って看護したかった。でも、できなかった。

それから2週間ほどした昼休みのことだった。食事中に先輩ナースが話しかけてきた。

「美和子ちゃん、もう聞いた？」

「何をですか？」

美和子は見当もつかず聞き返した。

「特別病棟が新設されるらしいよ」

「特別病棟って何ですか？」

美和子は訊いた。

「患者さんの性欲処をしてストレスを軽減させる専門の病棟なんだって」

先輩ナースは興味無さそうに言った。

「性欲処理？ですか？」

「そう。性欲を解消することで治療効果がアップするんだって」

「へえ、どんなことをするんですかね？」

美和子は興味を惹かれた。だが、顔には出さなかった。食事休憩に入る前に少年の射精サポートをしてきたばかりでペニスのぬくもりが手の中に残っていて、この話は偶然には思えなかった。

「まだ具体的に聞いてないけど、性交もあるみたい」

「え？性交ですか？」

「うん。セックス。いくら患者さんのためって言われてもね。私はできないなあ。美和子ちゃんは？」

「え？私は・・・」

「そうよね。いくらなんでもセックスは無理よね」

美和子にはもう先輩の声は届いていなかった。

こんなに早くチャンスが来るなんて、と美和子は喜んだ。ずっと待ち望んでいた看護ができる。絶対に特別病棟に行きたい。患者さんのためにできるだけことはしたい。私の体と真心を捧げたい。美和子にとって特別病棟は避けられない場所に思えた。

その日のうちに、美和子は特別病棟への移動願いを提出した。それからあつという間だった。正式に移動が決まって性交病棟の一員となったとき、美和子は 22 歳になっていた。少年はもう退院していた。

あれから 8 年。30 歳になった美和子は性交病棟では毎日欠かさず性交看護をしていた。誰よりも患者さんのために性交できている自負はあった。恋人とも別れて性交看護以外でセックスはしていない。マスターベーションすらしていない。

なのに今は性交の機会に恵まれない。病室では 3 人のナースが性交看護をしている。廊下でも性交看護が行われている。きっとほかの病室でも性交看護が行われているはずだ。

「性交看護をしたい」

美和子はそう呟いてから少年患者の勃起したペニスを思い出した。温かなぬくもりがまだ手のひらに残っていた。そのぬくもりの記憶だけで美和子の膺から愛液が溢れでてきた。

「性交看護がしたい」

美和子はもう一度呟いた。

だが、患者に求められていない。悲しいけれど、それが現実だった。自分ができていない性交看護をほかのナースたちはどんな風に行っているのか？もっと知りたいと強く感じた。知ればきっと悔しさが溢れ、見れば後悔するとわかっていたが、それでも見たかった。

美和子は忘れ物をしたかのように振る舞って、間仕切りの向こうで性交看護をしている百合花の横を通りすぎて、担当患者のいる病室に戻った。相変わらず担当患者以外のカーテンは閉められていて、ギシギシとベッドの揺れる音が病室内に響いていた。あの三つのベッドではどのような性交看護が行われているか？薄いカーテンの向こう側から聞こえる喘ぎ声の姿を知りたくて、美和子は覗きたい欲求を抑えられなかった。